The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

清沢満之の進化論批判

角田玲子

はじめに

清沢満之（文久四年～明治三十六年・一八六三～一九〇三年）の活躍した明治初頭、進化論は西欧科学の学問的成果の最先端であり、かれもそれについては認めるところであった。しかしのちにかれは「進化」という概念そのものに批判的な検討を加え、進化論を仏教の体系知に取り込むかたちで、独自の立場を指示することになる。これについては、すでに神戸（一九七九年）・安富（一九九九年）[1]をはじめとする指摘がある。そこで本稿はとくに、満之の目指した仏教の哲学的体系知からの近代文明批評という側面を照射することを目的としてかれの進化論批判について検討する。

一、進化論をめぐって

ダーウィンの『種の起源』（一八五九年）の出版によって、広く議論を呼ぶことになった進化論は、そもそも現存する多数の生物の種類が、一つ、または少数の共通の原基的・祖先的生物から、長い年月をかけて、自然的原因によって変化分岐してきたという考え方である。この生物進化論の登場は、思想的にも大きな影響力を持ち、西欧社会において、万物の創造主たる神に根元的な懐疑を投げかけた。ひきつづき十九世紀後半にさしかかると、進化の理論はスペンサー（一八二〇～一九〇三年）の展開した社会進化論として広まっていくこととなる。スペンサーはこの社会進化論によって、社会を静的なものではなく、動的な発展の相においてとらえる視座を得て、普遍的法則としての「進化」による総合的な哲学体系をつくりあげ、これは当時アメリカで大流行の思想となった。自然に基づく適者生存こそが進化の原則に適うものであるとして、弱肉強食型の社会を肯定するこの思想は、日本にも開明思想として伝えられ、日本の近代化の理論基盤となっていった。

印度學佛教學研究第五十三巻第二号　平成十七年三月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

二、満之の進化論批判

満之もまた、東京大学でフェノロサらを通して知ったスペンサー哲学に、強い関心をもっていたが、ほどなく社会進化論に対しては批判的立場をとるようになる。[2] この際の満之の批判は独特である。満之は、弱肉強食型社会の肯定に至る社会進化論をヒューマニズム的な立場から批判するのでも、反西欧・反科学の立場から反論するのでもなく、近代西欧科学を根本から支える「進化」という概念そのものを、きわめて理論的なレベルで俎上に載せるのである。すなわち満之は近代進化論に対して、仏教の因果理論を対置させて論じる。かれは進化論による一元的な世界の説明に対して、「進化論は決して宇宙絶対唯一の真理にあらざる」（「仏教と進化論」全集3-208）[3] として、これを仏法によって相対化する立場をとるのである。

『宗教哲学骸骨』（明治二十五・一八九二年）において、かれは独自の万物一体・有機組織の構想を示して、その立場から進化論を検討している。しかし満之はそもそも西欧科学そのものに否定的なのではなかった。その証拠に、おなじ『骸骨』において、「実際の研究」（科学的な実験）ということを考えるなら、誰にでも現に観察することが可能な進化や遺伝の研究のほうが、われわれにとって有用であり実効があるという発言をしている（全集1-19）。つまり満之にとって進化論は、間違った説明ではないが、全体的な説明になっていないという点が問題なのである。しかしこれは裏を返せば、進化論は部分的にせよ、世界をまたは人間を、説明することができるのだというかれの科学に対する信頼感を示してもいる。

三、満之の「因果の理法」と「精神の進化」

「進化」は自然現象において、数ある変化のうち、一筋の「因―果」ではあるが、「因」を成り立たしめているもの、「果」を成り立たしめているものは、それぞれ無数の「縁」である。進化論はこの無数の関係の可能性を解き明かすに至っていないのである。満之はこの「因―縁―果」の関係について、ヘーゲルの「三段規範」をとりあげて説明している。そもそも「因果の理法」とは、因と果とに必然の関係があるということを説明することである。しかしなぜある一つの因が果に転ずるのかということは、ただ因―果という二つの範疇では説明ができないのではないか。そこでヘーゲルは正反合ということを提示してこれをより詳細に説明しようと試みたのである。[4]「一体の変化するには必ずその他に客体の存するを要す。主客二体の会合によりて、その所に始めて一段の結果を生ずるを見る。ヘーゲルの反といへるは、けだしこの客体を指せるなり」（『宗教哲学骸骨』全集1-208）と満之は説明する。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

この主―客―会とは、有限的な現象世界にある一霊魂としての「主」が、「他」あるいは「因に関係あるものを総括するもの」としての「客」と出会うことによって、あらゆる事物に有機的に関係し、依拠していることを知るということである。満之はこの事物の有機的な関係性を明らかにしてゆくことが人間の「精神の進化」であるとしている。

「若し心識三世因果の考究にして精密なるを得ば、其精細なるの度に応して前世の心識よりして後世の心識を推定することを得るものなり」（「仏教と進化論」全集3-214、原文はすべて傍点付き）。「考究にして精密なるを得ば」という語には、かれの科学に対する信頼と同等のものが感じられる。このような仏教的時間観念を視野に、満之は「三世」にわたる「精神の進化」を期するべきことを説くのであり、そこに彼の近代文明批判としての進化論批判の帰結があると思われる。

おわりに

満之の立場は、仏教を近代化するスタイルをとりながらも、常にそこから近代・文明批判を行なっており、いわゆる近代理性の思考の枠組みからあふれ出てしまう発想の核を内部に懐胎している。日本における近代化の最初期に、近代を越え出ようとする、このような可能性を含んだ思想が存在したことはそれ自体注目に値するであろうし、[5] また直接的ではなくとも、その後の日本の思想や哲学への影響は少なくないのである。

1　神戸和麿「清沢満之の精神主義、―進化論的人間観への批判―」（『真宗研究』第23編、一九七九『資料清沢満之』同朋舎出版、一九九一所収）安富信哉『清沢満之と個の思想』（法蔵館、一九九九）

2　ただし、満之はスペンサー哲学の「不可知の世界」について重要視する発言をしている（「有限無限録」三三、不可知的参照。）よって満之がスペンサー哲学全体に否定的な評価をしているということではない。

3　『清沢満之全集』（岩波書店、二〇〇二）巻頁は本文中に記した。

4　これに関しては、拙稿「清沢満之における霊魂の転化」（研究成果報告書　研究課題番号12610035（基盤研究（C）（2））「因果観をてがかりとした道元の行為の理論の研究」、二〇〇三）を参照。

5　千田智子「南方熊楠におけるヨーロッパ的科学思想と密教的世界の統合」（『比較思想研究』27、二〇〇〇）によると、満之の同時代人で、独特の密教的世界観を構築した南方熊楠（一八六七～一九四一）もまた、スペンサーへの傾倒を経たのち批判に転じ、満之の発想との親近性を示している。

〈キーワード〉清沢満之、精神の進化、スペンサー、社会進化論

（お茶の水女子大学大学院博士課程満期退学）

NII-Electronic Library Service